
快樂の記憶

栗原峰幸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

快樂の記憶

【Nコード】

N0424J

【作者名】

栗原峰幸

【あらすじ】

うつ病を患う高志は父が死に途方に暮れた。亡父の釣友である工藤から釣りに誘われ、その後、高志は工藤の妻の美知子に惹かれる。やがてプラトニックな恋仲となる高志と美知子。恩のある工藤への思いと、美知子との関係の中で高志は葛藤する。やがて工藤も二人の関係を知ることとなり、家を飛び出した美知子は高志の家へやってきて、男女の関係を迫る。物語の関係上、官能描写がありますので、苦手な方はご注意ください。

その時、木村高志は呆然としていた。まだ、唯一の肉親であった父の死を受け止められないでいた。確かに喪主を務め、こうして高志の目の前には骨壺さえある。だが、本当に父が死んだ実感が持てないでいたのである。

それは無理もないことだった。朝、普通にジョギングに出たまま、交通事故に遭うという突然死だったのだから。

高志の母親はとつくに癌で亡くなっていた。高志は一人っ子だったから、天涯孤独になってしまったのである。

「どうしてだよ……。父さん……」

高志は物言わぬ遺骨に向かって呟いた。無論、返事など返って来るはずもない。それでも高志の口からは自然と呟きが出てしまうのだ。

会社の忌引きは二週間ある。だが、高志には忌引きなど関係なかった。この一ヶ月、高志は会社へ入社していない。忙殺される業務と、人癌関係の悪さからうつ病を患い、療養休暇を取っていたからである。そんな高志にとって、父の死は更に気分を憂鬱にさせた。葬儀には会社の関係者も来たし、高志の知らない父の友人も多数列席した。うつ病を患っているからといって、表舞台から身を引くことは喪主として許されなかった。その気苦労も有ったのだらう。葬儀のドタバタが終わってから高志は、毎日遺骨を眺めながら呆けた日々を送っていた。四十九日など大分先のことに思えだし、考えたくもない高志であった。

高志は「よいしょ」と腰を上げると、父の部屋に入った。つい先日まで、父がここにいたと思うと、無性に空しく感じる高志であった。高志は壁際に立てかけてある釣竿に目をやった。

生前、高志の父は沖釣りをこよなく愛していた。沖釣りと言っても小物が中心で、中でも父が好んで釣っていたのはシロギスだった。

父の愛用の竿を握ると、高志は軽く振ってみた。すると、ビュツという風を切る音がする。それは淀みがちな高志の家の空気をいくらか循環させる効果でもあったであろうか。高志は何度も釣竿を振った。

父の生前、何度かは釣りに付き合ったこともある高志だが、本格的な釣り好きというわけではなかった。それでも高志の心の隙を埋めるように振られた釣竿は唸った。

高志の家に電話が入ったのは、その日の晩だった。父の友人で工藤という男からの電話だった。高志は工藤とは面識があった。家に何度か遊びに来たこともある。すると父と工藤は酒を酌み交わしながら、夜更けまで釣り談義に興じていたものだ。高志の父と工藤は釣り友達だったのだ。

「高志君の病気のことは、生前、お父さんから聞いていますよ。実は今度、お父さんを偲ぶ釣り船を仕立てようと思うんだが、高志君にも是非参加してもらいたいと思ってね」

「はあ、まだ父が死んだ実感が湧かないんですよ」

「まあ、そうだろうねえ。何せ突然だったからねえ。まあ、病気のこともあるし、無理には言わないよ」

「今日、実は昼間、父の釣竿を振ってみたんです。そうしたら、風がビュツと鳴って……」

「それは釣りマニアしか出せない音だ。心に沁みただろう」

「父が釣り好きだった理由が少しわかった気がします」

「だったら来なよ。お父さんが好きだったシロギスを仕立てるからさ」

工藤は気さくな男だった。そんな明るい彼の声を聞き、父を偲んでくれるだけでもありがたいと思う高志であった。

「いいんですか？ 僕はまだ素人ですよ」

「釣りは老若男女楽しめるレジャーだ。そんなに敷居が高いわけじゃないよ」

工藤のその言葉に後押しされるように、高志は「参加させて頂きます」と答えたのだった。

それほどのめり込んでいたわけではないが、高志には釣りの経験がある。新しいことを始めるにはエネルギーが必要だが、釣りに乗るのは初めてではない。それほど、苦にもならないだろうと考えていた高志であった。実際、うつ病を患っている場合、新しいことに引き裂くエネルギーは想像以上のものがあるのだ。

そして、釣りの当日の日曜日。高志は眠い目を擦りながら、茅ヶ崎漁港の「まごうの丸」の待合にいた。高志はもともと朝が苦手な方ではなかったが、うつ病を患ってからというもの、朝方に気分の優れないことが多くなった。

「よう、高志君。おはよう」

気さくに声を掛けてくれたのは工藤だった。

「ああ、工藤さん、おはようございます。今日はよろしくお願い致します」

「何、言っているんだ。今日は君が主役だぞ」

「僕が？」

「今日集まったのは、君のお父さんの釣り仲間だ。こっちが高田さんで、あっちが桑原さん……」

工藤は次々に父の釣り仲間を紹介していった。その度に高志は頭を下げる。

「まあ、今日はお父さんを偲ぶ釣行でもあるんだけど、それ以上に君に釣りの楽しさを教えようと、みんな集まってくれたんだ」

「生前父が大変お世話になりました、今日、またこのような釣行を企画して頂き、感謝の気持ちで一杯です」

高志が一同に頭を下げた。みんなにこやかに笑っていた。

「君のお父さんはね、シロギスを釣るのが上手くてね。いつも一束（百匹）くらいは釣っていたと思うよ。まあ、君もお父さんの血が流れているんだ。五十くらいは固いんじゃないか？」

高田という男が人懐っこい笑みを浮かべながら、語りかけてきた。高志は照れたように愛想笑いを返した。

「お父さんの釣竿を持ってきたんだね」

工藤が高志の握っている竿を見て言った。

「ええ、父はシロギスを釣りに行く時、いつもこの竿を持っていたからね」

「その竿は良い竿だよ。その竿には君のお父さんの記憶が詰まっているんだ。大切に使うといいよ」

高志は「はい」と頷きながら、竿を握り締めた。その竿には生前、父が入念にメンテナンスを施したリールが装着されている。

「そろそろ、船の方へ移動お願いします」

係りの者が高志たちを漁港の方へと案内した。

船はまるで生命でも宿っているかのようなエンジン音を唸らせて出船した。高志は「胴の間」と呼ばれる船の中央付近、つまりは操舵室の脇に陣取った。隣には工藤が座っている。

船旅は長くはなかった。烏帽子岩の西側で何度か潮回りをするとポイントが決まったようので停止した。当日は波もなく、凪だった。

(酔い止めを飲むほどでもなかったな……)

高志はそんなことを思いながら、釣り針に餌のジャリメを付ける。ジャリメは頭の硬いところを取り除き、針に対して真っ直ぐに装着するのが基本だと、父に教わったことを思い出していた。

「はいどうぞ。水深十七メートルです」

船長のアナウンスと同時に、みんな一斉に仕掛けを放った。工藤も前方、十メートルくらいのところへ、アンダースローで仕掛けを投げた。高志は仕掛けを投げはせず、船下へと落とした。実はあまり竿とリールの扱いに慣れていない高志であった。

周囲ではポツポツとシロギスが上がり始めていた。工藤が二十センチそこそこの良型のシロギスを早速釣り上げている。工藤は仕掛けが投げられない高志を気遣ってか、丁寧なアドバイスをしてくれ

た。

「船下を狙う時は、コツコツと底を小突きながら、時々、止めてやるといいよ。止めた時が食わせのタイミングだから……」

その位のことには父からもアドバイスを受けたことがある高志であったが、自分のことを気遣ってくれる工藤の好意が嬉しかった。

するとどうだろう。ブルブルという感触が高志の手元に伝わり、竿先が引き込まれた。

「僕にも来たみたいですよ」

高志はリールを巻いた。すると、二十センチ弱くらいのシロギスが上がってきた。今日、初の獲物だ。高志はシロギスの魚体を繁々と眺めた。それはパールピンクのように輝き、誠に美しかった。高志は少々、不器用な手つきで針を外すと、足元のバケツにシロギスを放った。シロギスは少し茶色がかった背中を見せながら、窮屈そうにバケツの中を泳ぎ回った。

「シロギスっていう魚はビギナーでも簡単に釣れるけど、奥の深い魚なんだ。数を伸ばそうとすると、それなりに技術も必要だしね。君のお父さんは小物釣りの中でも、このシロギスが一番好きだったんじゃないかな」

「多分、そうだと思います。よくシロギスの天ぷらを食べさせてくれましたからね。釣ったシロギスは、スーパーのそれとは比べ物になりませんよ」

「そうだろう。スーパーで売っているキスは大体中国から輸入された冷凍物で独特の臭みがあるもんだ」

そんな会話をしながらも工藤は、どんどんシロギスを釣り上げていく。その技は高志にとって名人と思えたものである。それに比べ、高志は一匹釣ったのみで、後が続かない。丹念に底を小突いてみるが、魚からの返事がないのだ。

「やっぱり投げた方が有利ですか？」

「うん、そうだね。それだけ広範囲を探れるからね。大体、五メートルくらい先に群れがいるみたいだね。その辺でよくアタるよ。投

げるのは難しくないよ。アンダースローでひよいと投げてやりやい
いんだ」

高志は投げて釣ってみることにした。ギリギリまで仕掛けを巻き、
沖へ向かってアンダースローで投げる。それは少々フライ気味だっ
たが、確かに前方へ飛んでいった。

「素早くリールを巻いて、糸フケを取って」

工藤の言われた通りにする。そして、工藤のようにゆっくりと手
前へ引いてきた。途中でブルブルという魚信が伝わった。高志は父
の竿の感度の良さに驚かされていた。底の砂の感触や、魚が餌を啜
えている感触までダイレクトに手元に響くのだ。それは高志が感じ
るものでもあったが、あたかも竿が釣りのコツを記憶しているよう
だった。

アンダースローをマスターした高志は、仕掛けを投げ、快調にシ
ロギスの数を伸ばしていった。周囲からは「さすが木村さんの息子
さんだな」という声が聞こえた。時折、メゴチが釣れてくる。又メ
リの強い魚だが、これも天ぷらで美味であることで知られている。
中には「キスより美味」と賞賛する者もいるくらいだ。そして、シ
ロギスやメゴチより強い引きが訪れると、それはハウボウだった。
「いやー、今日は楽しいですよ。いつ以来かなあ、こんな楽しいな
んて思うのは……」

「そうか、楽しんでくれているか。そいつは良かった。実は病気の
君を誘ってよかったのかと、ちよっぴり自信がなかったんだ」

工藤が照れくさそうに言った。高志は「照れることはないだろう」
と思いつつも、工藤に感謝していた。

「いや、誘ってもらって、すごく嬉しいですよ」

「はあ、家内もこういう楽しさをわかってくれたらなあ」

工藤がため息まじりに呟いた。

「実はうちの家内もうつ病なんだよ。もう五年になる……」

工藤がボソツと呟いた。高志は「え？」と、工藤の顔を覗き込ん
だ。工藤は竿先を見つめながら、深いため息をついた。

「家事もろくにできず、家の中でゴロゴロしてばかりいるのだが、本人には辛いらしい。そうだ、今夜、シロギスの天ぷらをうちで食べないか？ できれば家内の話し相手にもなってもらいたいんだ。同じ病気を患っている者同士としてね……」

「いいんですか、お邪魔しちゃって？」

「いや、君には是非ともうちに来てもらいたい」

工藤の瞳は真剣だった。

「わかりました」

高志は神妙な顔つきで、そう答えた。すると工藤は、「よかった」と言つて、一度引き上げた仕掛けを、また沖に放つた。そして、その直後にシロギスを抜き上げた。

「いやー、釣りつてやつは快楽を刺激するな。そして、記憶としてしつかり刻まれていく」

工藤が釣り上げたシロギスを愛しそうに眺めた。

（快楽の記憶かぁ……）

今日の釣れ具合をみると、工藤のその言葉は真理を語っているような気がする高志であった。

「それにしても今日は入れ食いだな。きつと高志君のお父さんが我々に釣らせてくれてるんだよ」

そんなことを言い出す者もいた。高志の竿先がまた絞り込まれた。

高志は釣りを終えて、一旦家へ帰ってから工藤の家へと向かった。工藤から「今夜はシロギスの天ぷらで一杯やろう」と言われていたので、車を家に置いてきたのである。高志の家から、工藤の家へは割りと近い。電車で一駅だ。

高志は工藤の家の表札を見て、彼の名が「武雄」であることを知った。

（いつも、工藤さんとか呼んでいなかったからなあ……）

工藤はエプロン姿で高志を迎えてくれた。丁度、シロギスを捌いているところだという。高志はすっかり工藤にご馳走になるつもり

で、釣れたシロギスをすべて彼に託していた。

「じゃあ、僕も捌きますよ」

高志は腕まくりをした。しかし、工藤は「君にはやってもらいた
いことがある」と言っつて、高志を奥の間へと通した。

奥の間でゴロリと横たわっている女性がいる。

「家内の美知子だ。ほら、美知子、お客さんだぞ」

だが、美知子は半身を起こすと、いかにも面倒臭そうな表情をし
て言った。

「あれほど、うちには人を呼ばないでっつて言っつてあるじゃない」

「この高志君は私の亡くなった釣り仲間の息子さんなんだよ」

「初めまして、木村高志です」

高志が丁寧な頭を下げた。だが、美知子はつまらないものでも見
るように高志を一瞥した。

「この高志君も美知子と同じうつ病なんだよ」

「へえー、そうなの？」

「正直、私はお前の病気のことがよくわからん。高志君ならば、お
前の気持ちや病気のことを理解してくれるだろうと思っつてな……」

高志はまじまじと工藤の顔を見た。彼の顔は苦渋に満ちていた。

「よろしくお願ひします」

高志が美知子に歩み寄つた。そして、正座で座る。

「じゃあ、私は台所にいるから、高志君は妻の話し相手にでもなっ
てやっつてくれ」

工藤はそう言っつと、台所に引き上げていっつた。こうして高志と美
知子だけの空間が出来上がったのである。

だが、正直なところ、何から話を切り出せばよいのかわからない
高志であつた。高志は美知子の顔を眺めた。瞳は虚ろだつたが、美
知子も確かに高志を見つめていた。美知子は表情は冴えないものの、
大人の色香を湛えた美女であつた。少なくとも高志にはそう思えた。
「奥さんもうつ病……なんですか？」

「そうよ。もう五年になるわ。あー、嫌ねこの何もしたくないっつて

いう気持ち……。身体の中に鉛が入っているみたい」

「わかります。その気持ちと身体が動かない感覚……。僕もよくありませんから……」

美知子が「よいしょ」と言って、身体を起こした。

「主人には家事から何まで、全部やらせつきりで悪いと思っているのよ。でも、身体が動かないの。一日中、憂鬱な気分が抜けなくて……」

「僕は特に朝方が駄目ですね。朝、起きられないこともよくありますよ。死にたいって思ったこともあります」

「そうでしょ、そうでしょ！」

急に美知子が身体を乗り出してきた。

「安定剤に抗うつ剤、それに眠剤だけで二十錠近くも飲んでいるのよ。でも、全然駄目……。いつも身体がかつたるくって……」

「僕も同じくらい、薬を飲んでいますよ。ところで、ご趣味は？」

「ずっと、子育てに追われながら、家を守ってきたのよ。趣味なんて作る暇がなかったわ。それでもね、気分の良い日には近くを散歩するくらいのことにはしているの。子どもも巣立つちゃったから、することと言ったらそのくらいかしら」

美知子が「くすつ」と笑った。歳を取って尚、その笑顔はチャーミングだった。

「散歩はいいですね。僕も休職中の身なんですけど、たまに散歩をしますよ」

「ふふ、私の場合、ダラダラ歩いているだけだけどね」

美知子が「あははは」と笑う。釣られて高志も笑った。

「僕の場合、仕事が忙しかったのと、人間関係で発病したんですが、奥さんは？」

「私は子育てが終わって、何も残らなかったのよ。でもパートに出ただけけど、そこで結構苛められて……。ああ、思い出すだけでも嫌だわ」

「僕も思い出すの嫌です」

高志がそう言つと、美知子は「お互い似た者同士ね」と言つて、クスツと笑つた。

「わかりますよ、奥さんの気持ち。本当、僕達似た者同士ですね。身体が動かない感覚、よくわかります」

「ああ、やつと理解してくれる人に巡り会えた感じ……」

美知子が前髪を掻き揚げた。少しパーマのかかった髪はフワツと揺れた。

台所からは天ぷらを揚げる音がジューツと聞こえていた。

「それにしても、うつ病を患っているのに奥さんは若いし、綺麗ですな」

「あらやだ、誉めたつて何も出ないわよ」

「いやいや、家でゴロゴロするのがいいんだと思います。自分のしたいようにするっていうのが、人を若返らせたり、綺麗にさせたりするんじゃないでしょうか」

「まあ、嬉しいこと言つてくれるじゃない」

「僕はまだ小さい頃に母親を亡くしましてね。奥さんのような人が母親だったら、みんなに自慢できるな」

「あら、私は母親的な存在？ 女としては見てくれないの？」

美知子が少しむくれたような顔をする。高志は軽く咳払いをして、「だって旦那さんに悪いじゃないですか」と弁解をした。すると、美知子は意味深な笑みを浮かべて「お馬鹿さん」と言った。

どのくらい高志と美知子は談笑していただろうか。満足そうな顔をした工藤が「シロギスの天ぷらが出来上がった」と言つて、二人を居間へ招いた。

「美知子の笑顔を見るのなんて何年振りかなあ……」

工藤は感慨深く美知子の表情を見て言つた。

「さあ、今日は飲むぞ。高志君も酒はイケるんだろう？」

「本当は精神薬にアルコールは禁忌なんですけど、多少でしたら……」

「そうか。今日はシロギスも入れ食いだつたし、久々に美知子の笑い声も聞けたし、満足だ。ほら、美知子、お前も飲め」

そう言って工藤はビールの栓を空けた。金色の泡がそれぞれのコップに注がれた。

「乾杯！」

グラスがカチンと鳴る。工藤と高志は一気にビールを飲み乾した。美知子はチビチビと舐めていた。

「シロギスの天ぷらは天つゆより、塩の方が合うんだ。まるでおやつみたいに食べられるぞ」

工藤は小皿に盛った塩を差し出した。

高志はシロギスの天ぷらを箸で摘むと、少しだけ塩をつけ、頬張った。それは衣がサクサクとしながらも、中の身はフワツとしていた。それはまるでお菓子のようであった。

「美味しい。美味しいですよ、シロギス……！」

「そうだろう。だが、君のお父さんもよく釣ってきていたんじゃないののか？」

「ええ、父が死んで、もうシロギスの天ぷらは食べられないと思っていました。幸せです」

「シロギスは釣って面白いし、食べても美味しい。趣味と実益を兼ねた食材だな。美知子にも釣りの楽しさを教えてやりたいんだが、船酔いしやすい性質でね」

「私はいいの。この天ぷらが食べられれば……。それに釣りって、あのジャリメとかアオイソメとかいう虫を使うんでしょ？ 私には無理無理」

美知子が笑った。その笑顔を工藤は満足そうに眺めていた。

翌朝、高志は会社からの電話で目覚めた。寝起きに課長の声を聞くのは、正直なところしんどかった。

「どうだね、体調の方は？」

「まだ、朝方が辛いことが多いです」

「そうか。お父様があんなことになった後で正直なところ、辛いと思うんだが、実は産業医の先生から君のデイケア参加の提案があっ

てな」

「デイケア……ですか？」

「うむ、A心療クリニックで復職のためのデイケアを行っているそうだ。会社側としては、是非ともそれに参加してもらって、復職に備えてもらいたいと思っている。まずは主治医に相談してみたまえ」

「はあ……」

高志が気のない返事を返したのも無理はない。高志にはデイケアのイメージがまったく湧かなかつた。

主治医はすんなりとデイケアのための紹介状を書いてくれた。その紹介状を持ってA心療クリニックを訪れた高志は、いかにうつ病を患っている人が多いか知ることになる。デイケアのフロアは人で溢れていたのである。

二回の体験を経て、高志は正式にデイケアに参加することとなった。

その日は午前中のプログラムがカレー作りであった。昼食をみんなで作ろうというのだ。ジャガイモの皮を剥く時、隣にいる男性に高志は話しかけてみた。

「あなたもうつ病ですか？」

「ええ、もう二回目です。復職しても続かなくてねえ……」

男は自嘲的に笑った。だが厭味ではない。

「僕もうつ病になっちゃいましたね。どうしたものかと思っているんですよ」

「まあ、気軽に構えることが一番だと思いますよ。もう二回目になると焦る気持ちも湧かないですよ」

男は笑ってニンジンの皮を剥いていた。高志は「ふう」とため息をつくと、また包丁を握った。

カレー作りにこだわる者もいた。買出しでグラムマサラやローリエまで買ってきていた。デイケアの参加者のほとんどは男性だった。女性はまばらに見られるくらいである。そんな男達が作ったカレーはどことなくあくが強い。そんな香りを漂わせていた。

昼食のカレーを食べながら、高志は数人と語らった。うつ病をも
う七年も患っている者、うつ病だと思っただら統合失調症と診断され
た者、高志と同じように休職している者、三者三様であった。高志
は同じような悩みを抱えている者同士が支えあい、このデイケアが
成り立っているように思えた。お互い、過度の干渉はしない。だが、
悩みを打ち明ければ、みんな親身に答えてくれる。そんな雰囲気
の場だった。

(これは、工藤さんの奥さんにもいいプログラムかもしれない)

高志はそんなことを思っていた。それにデイケアは居心地の良い
空間だった。

高志が工藤の家に電話を入れたのは、その晩だった。

「実は奥様に是非デイケアをお勧めしたくって」

「デイケア？」

工藤もデイケアと言われ、ピンとこなかったらしい。ややもする
と素っ頓狂な声を上げた。

「はい、僕も行き始めたんですが、うつ病の人に良いプログラムが
用意されているんですよ。よかつたら、奥様もデイケアに参加して
みてはいかがかと……」

「うーん、うちにいてもゴロゴロしているだけだからな。多少は社
会とのつながりを持っておいた方が良くもしいかな。まあ、行
ければの話だが……。何しろ友達にも会えないくらいなんだ」

工藤は家の中でゴロゴロする美知子に対し、本心はどう思ってい
るのだろうか和高志は思った。もしかしたら、腫れ物に触るような
対応でもしているのかと邪推するが、献身的に家事をこなすなど、
工藤の行動力を考えれば、我妻への想いは複雑だろうと思った。

「まあ一応、家内には話しておくよ。いや、気遣ってくれてありが
とう」

「いえ、そんな感謝されるほどのもんじゃありません。ただの情報で
すから……」

そうは言っても、高志には少し期待があったのも事実だ。美知子は歳こそ母親のようなそれだが、実際より若く見えだし、何より美しかった。そんな美知子が参加してくれば、デイケアはより楽しい時間になるだろうという下心が高志にはあったのである。だが、かといって美知子と関係を持つとうなどとは思ってもいない高志であった。

答えはすぐにやってきた。ものの一時間ほどで美知子本人から高志に電話があったのだ。

それは「興味があるから是非参加したい」との意向だった。高志は美知子本人から電話をもらえるとは思ってもいなかった。上ずった声で「じゃあ、スタッフに連絡しておきます」と言った。高志は内心、ウキウキしていた。それは心臓が喜んでいるように感じたほどだった。

美知子はデイケアに参加しだした。高志にとって嬉しかったのは自分と同じ曜日に美知子がデイケアに参加してくれたことだった。だいたい、女性は火曜日と木曜日が中心に参加していたのだが、美知子は高志と同じ月曜日、水曜日、次いで金曜日に参加していたのだ。そして、その度に入念な化粧を施した美知子はデイケアの中にあつて一際輝いて見えた。高志はそんな美知子を見るのが嬉しかった。美知子も高志がいて安心したのだろう。よく高志の隣に来ては、話を振ってきた。

ある日、高志は美知子から「帰りにお茶でもどう？」と誘いを受けた。高志は内心、「やった！」と喜びながら、「ああ、いいですよ」と冷静を装って答えた。

デイケアの帰りに向かったのは、A心療クリニックからも程近いカフェである。美知子はレモンティーを、高志はエスプレッソコーヒーを注文し、面通しで座った。

「本当にあなたには感謝しているわ。デイケアなんて普通に生活していたらわからないもの」

「いやー、奥さん、見違えるように元気になりましたよ。見ていてわかります」

「そう？ だったらデイケアというより、あなたのお陰ね」

「え？」

「私は火曜日と木曜日の参加を勧められたんだけど、あなたと同じ曜日を選んだのよ」

美知子が意味深に笑った。高志は心臓が「ドキン！」と脈打つのがわかった。

「僕がいると安心ですか？」

「そうじゃないわよ。男って本当に鈍いのね」

その美知子の言葉に、高志はどう切り替えしていいのか、正直なところ、わからなかった。ただ、心臓だけがバクバクと脈打つ。

「あなた、初めてうちに来た時から、私のこと気になっていましたでしょう？」

美知子は小悪魔のような微笑を湛えて、いつまでも返事を返さない高志に向かって言った。高志は本心を見抜かれたような気がして、更に言葉を失った。濃いエスプレッソのような濃密な時間だった。

「いいのよ。うちの人に遠慮しなくて……。家ではトドなんて言われているんだから。夫はね、色々家事をこなしてくれるけど、もうお互い『男と女』ではないのよ。まあ、掛替えのないパートナーであることは認めるんだけど、空気みたいなものかな。そんな私にあなたは男の視線を送ってくれた。女として見てくれた。それが嬉しかったの。私ってまだ女なんだなって……」

「奥さん……」

高志が唾を飲み込んだ。その音は鼓膜を直接刺激し、脳内で反芻する。

「あなたには『美知子』って呼んでほしいな……。私もあなたを男として見ているの」

そう言った美知子の瞳は潤んでいた。高志はこのまま美知子を抱きしめてしまいたい欲求に駆られた。だが、グツとそれを抑える。

そんなことをすれば工藤に顔向けできないばかりか、恩を仇で返すことになる。

「美知子さん、僕はあなたの希望には添えませんよ……」

高志はボソツと呟いた。それは苦しく重い言葉だった。

「ふふっ、やっぱりこんなオバサンじゃ駄目かあ」

美知子が自嘲するように笑った。だが、どこか物悲しい笑顔だった。

「いや、そうじゃないんです!」

高志はムキになって否定した。

「そうじゃないんですよ。美知子さんは魅力的だし、本当は明るくて楽しい人なんだろうなと思います。でも旦那さんのことを思うとやっぱり……」

「そっか……」

寂しそうな顔をして、美知子がレモンティーを啜った。気まずい時間が流れた。カフェの片隅で親子ほど歳の離れた男女が二人、固まっていた。

「プラトニックじゃ駄目?」

美知子がやや上目遣いで高志の顔を覗き込んだ。高志は苦しそうな顔をする。高志にしてみればプラトニックな関係だけで、果たして我慢できるかどうかが問題だった。ただ、美知子に会えなくなるのは、もっと辛いと思っていた。ならば、美知子の提案を受け入れるしかない。

「いいですよ。僕も美知子さんのこと想っていますから……」

「嬉しい。やっぱりお茶に誘ってよかったわ」

ようやく美知子の顔が晴れた。美知子は「ふう」とため息をつくと、レモンティーを一気に流し込んだ。高志も残りわずかなエスプレッソコーヒーを飲み乾す。

「ねえ、駅まで送ってくれない?」

「いいですよ。エスコートします」

「嬉しいわ」

美知子が席を立つた。高志も席を立つ。二人は連れ立って駅の方へ向かって歩いた。美知子と高志は手をつないでいた。美知子の掌はほんのり温かった。

改札で二人は見詰め合った。高志にこのまま美知子の唇を奪ってしまいたい衝動が持ち上がったが、人通りの多い駅の改札でそんな行為に及ぶわけにもいかなかったし、「プラトニックな関係と誓ったじゃないか」と自分を戒めた。

「じゃあ、またデイケアの後、お茶デートしようね」

そう言っただけで美知子は手を振った。デートという言葉に、また高志の心臓が高鳴った。

「そうしましょう。美知子さんの背中が見えなくなるまで、ここで見送りますよ」

「ありがとうございます……」

美知子は名残惜しむように、何度も振り返った。高志は手を振り続けた。その背中が見えなくなるまで。

それからというもの、美知子と高志はデイケアの帰りには必ず「お茶デート」をするようになっていた。会う度に、高志は美知子を奪いたい欲求に駆られたが、己を戒めながらそれを抑えた。カフェで談笑する己の様子を見て、高志は高校時代に付き合った女の子のことを思い出したりもした。別に今、その娘のことが気になるわけではない。まるで青春時代の真ん中に、また放り込まれたような錯覚に陥ったのだ。

ある晩、高志の家の電話が鳴った。それは工藤からの電話だった。高志は美知子との関係がバレたかと思い、一瞬ドキッとした。しかし、それは高志を釣りに誘う電話だった。

「そろそろ、東京湾の寄りフグの時期なんだが、今度の土曜日に一緒に行かないか？」

「寄りフグ……ですか？」

「相模湾ではシロギスが禁漁になったし、東京湾のシロギスもパツ

としない。これから大貫沖の海苔棚周りでシヨウサイフグが数出るんだ。初心者にも入門の時期なんだよ。フグは宿で捌いて毒のない剥き身してくれるし楽なんだよな。竿はシロギス用のもので十分だから、是非行こうよ」

高志の脳裏には美知子の顔が浮んでいた。

「どう、乗り気じゃないかな？」

「いえ、喜んでご一緒させていただきます」

「そりゃ良かった。当日は朝の五時半に迎えに行くから、帰ってからフグ鍋で一杯やろう。実はこここのところ、家内もすこぶる調子が良いんだよ。鍋の準備をしておいてくれるって言っただ」

「いいんですか？ また甘えちゃって……」

「あははは、気にするなよ。家内も是非君に来てほしいと言っているんだ」

「わかりました。じゃあ、よろしくお願いします」

美知子は高志が来ることを楽しみにしているという。おそらく鍋の準備をしてくれるのも、自分のことを想ってのことだと高志は思った。おそらく、工藤一人の釣行ならば、美知子はそこまですまい。そんな自信が高志にはあった。だが当日、どのような顔をして工藤や美知子に接すればよいのか、迷っている高志であった。

釣りの当日、朝の五時半前には工藤は高志を迎えにきていた。高志は複雑な思いと釣りへの期待で、夕べは眠りが浅かった。それでも、工藤が迎えに来る頃にはしっかりと目覚めていた。

「今日、行く忠彦丸は人気の船宿だから、多少は混雑するかもしれないな」

工藤はそんなことを言いながら、車を飛ばした。高速道路を使えば意外と早く金沢八景に着くことができる。今日高志たちが乗る忠彦丸は金沢漁港の中にある。寄りフグの時期にだけフグの乗り合い船を出しているのだ。

工藤は機嫌がいいのか、よく喋った。高志は相槌を打ちながら工

藤の話聞いていた。すると、美知子の話題になった。

「いやー、高志君には感謝しているよ。家内はデイケアに通うようになって、こここのところ見違えるように元気になった感じがするなあ」

「家でも元気なんですか？」

「ああ、ゴロゴロしていることが少なくなったね。それに、化粧もするようになってね。もともと自慢の家内なんだが、また一段と綺麗になった気がするよ」

高志は思う。美知子は高志のために美しく化粧を施してくれているのだと。そんなことを思うと、工藤の顔を直視できない高志であった。

「君にだから言えるけどね、昨日、久々に家内と燃えちゃったんだよ」

高志は愛想笑いを返しながらも、カーツと頭に血が上るのがわかった。それは嫉妬以外の何物でもなかった。

（美知子さんは工藤さんに抱かれたんだ……。もう『男と女』の関係は終わっていると思っていたのに……）

高志の心臓が荒く鼓動を打つ。冷静を装いながらも、心の中は灼熱の嫉妬で燃え盛っていた。だが、高志は自分に言い聞かせた。

（僕たちはプラトニックな関係じゃないか……）

そう、それは美知子から言い出した関係だ。高志も美知子は工藤の妻であることに引け目を感じ、その関係で了承したはずだった。

「高志君は彼女いないのかい？」

「いると言えば、いますけど……」

高志は何と返答していいのか、わからなかった。

「アレは気持ちいいぞ」

高志の中で嫉妬の炎が一段と大きく燃え盛る。

工藤は上機嫌で尚も喋り続けていた。話題は釣りの話に移っていた。それは高志の耳から耳へと抜けていった。そんな高志の様子を不思議に思ったのだらう、工藤が「大丈夫か？」と尋ねてきた。

「朝方はやっぱりボーツとすることが多くて……。眠剤のせいですかねえ」

高志はとぼけて、そう言い訳をした。
車はもう、金沢漁港の門の中に滑り込んでいた。

朝の忠彦丸は慌しい様相を見せていた。待合室では早くから釣りフリークたちが集い、釣り談義に花を咲かせている。忠彦丸はフグの他にもライトアジやマダイなど様々な釣り船を出している人気の宿だ。工藤と高志は受付を済ますと、早速、釣りの準備に取り掛かった。船はもう、アイドリングを始めていた。

午前七時にフグの船は定刻どおり出船した。目指すは千葉県側の大貫沖である。大型船は風を切り、東京湾を横断していった。

工藤はカットウと呼ばれる仕掛けを竿先にぶら下げていた。オモリの下にフグを引つ掛ける三本針が付いており、その少し上に餌のエビを付ける針が付いている。餌をついばむフグを引つ掛ける釣りで、微妙なテクニクが要求される。

それに対し、高志の仕掛けは胴付き仕掛けと呼ばれる、食わせ餌の仕掛けである。船長のレクチャーではアタリがあったらすぐ合わせをいれるようにとのことだった。

三十分くらいの船旅で、大貫沖に到着した。そして、船は海苔棚の周囲をゆっくりと旋回する。魚群探知機がフグの群れを捕えたのだろう。船は海苔棚から少し離れたところで停泊した。

「はい、水深十五メートルです。どうぞ」

フグ釣りに熱くなった釣り人たちは、一斉に仕掛けを海中に放り込んだ。無論、工藤や高志も同様である。

工藤は底を小突くようにして、誘いをかけている。高志も仕掛けを踊らすように誘いをかけた。

答えはすぐに返ってきた。まず、高志の手元にコッソンというアタリが到来したのだ。高志は軽く合わせを入れると、リールを巻き上げた。フグの引きはその場に留まるうとするような何とも言えない

それだった。高志が抜き上げたのは、二十センチそこそこのシヨウサイフグだった。

「早速、釣ったな。キープサイズじゃないか」

工藤は竿を上下に揺らしながら、笑って高志の初フグを褒め称えてくれた。

「フグのあたりって小さいですね」

「そうだろう。いつの間にか餌が無くなっていることもあるから、餌のチェックは入念にな。おっと、こっちにもきた！」

工藤がリールを巻く。すると膨れたフグの腹に三本針ががっちり食い込んで上がってきた。これも二十センチそこそこのシヨウサイフグである。

「いやー、先週も釣りに行ったんだが、この快樂は止められないねえ」

工藤が愉快そうに笑った。高志は一匹こそ釣り上げたものの、苦戦していた。あたりもなく餌だけ取られてしまうのだ。

「どうだ、結構難しいだろう？」

「でもその分、熱くなっちゃいますね」

高志はそう言いながら、小さくカットしたエビを針に付ける。

「フグは丁度、ホバーリングするように餌をついばむことが出来るんだ。だからあたりも小さい。まあ、カワハギなんかと同じだな」

「そうなんですか……」

高志は仕掛けを海中に放った。そして、竿先に意識を集中させる。先週はカサゴに行ってきたんだよ」

そう言う工藤は二匹目を釣り上げている。フグは足元のバケツに放られた。

「私は毎週のように釣りに行っているけど、人間の欲望というのは限らないものだ、つくづく感じるねえ」

「人間の欲望ですか？」

「釣りに飽きることがないんだよ。やっぱり、この快樂は忘れられない。すぐまた行きたくなる」

「生前、父も同じようなことを言っていましたよ。僕はまだ経験が浅いけど……」

そんな会話をしていると、高志の持つ竿の手応えが急に軽くなった。不思議に思った高志は、すぐさまリールを巻いた。すると、グツという魚の重みが伝わったのである。

「ああ、きましたよ。デカイかもしれない！」

その魚は下に突っ込むような強い引きを見せ、抵抗を試みていた。高志は慎重に竿をためた。程なくして上がってきた魚は、三十センチを悠に越えるシヨウサイフグだった。

「おお、それはデカイな。いい鍋の材料になる」

工藤が嬉しそうに笑った。

船の沖揚がりは一時だった。忠彦丸のフグ船は半日船である。結果、工藤が二十五匹、高志は十六匹を釣り上げていた。そのフグは船宿でフグの包丁師免許を持つ担当が捌いて剥き身にしてくれる。家に帰って鱗を落とし、軽く水洗いすれば、無毒の美味なフグが食べられるのである。

「いやー、高志君も初挑戦にしてはなかなか上出来じゃないか」

「そうですかね？」

高志は照れたように笑った。食わせ釣りとはいえ、フグ釣りの妙味を堪能した高志だった。

「今日はこれだけ釣れば刺身だって出来るな。家内にもみじおろしを作っておいてもらおう」

工藤はそう言うと、携帯電話を弄りだした。そして、美知子に大漁の報告をしたのである。

（今夜は美知子さんとフグ鍋か……）

高志の顔も自然とほころんだ。だが、工藤の前で「美知子さん」などと呼ばないようにしなければと、高志は気持ちを幾分、引き締めていた。

美知子は家で鍋の用意を済ませていた。まだ日は高かったが、工

藤は酒を持ち出してきた。台所では美知子がフグ鍋の用意と、フグの刺身を作っている。

「奥様、台所に立てるようになってよかったですね」

「ん、まあな」

工藤は上機嫌で酒を煽った。高志も酒を飲む。

「美味しい酒ですね」

「立山だ。富山に知り合いがいてね、毎年、一番絞りを送ってくれるんだ」

そこへフグの刺身が運ばれてきた。やや厚く切ったフグの刺身は釣り人ならではの特権と言ってもいいだろう。もみじおろしを落としたポン酢でそれをいただくのだ。

「美味いだろう?」

「最高です!」

「シヨウサイフグの場合、無毒といっても弱毒があるから、食べすぎは禁物だが、三人で食べればすぐ片付く。残りは冷凍だ」

そう言いながら、工藤はフグの刺身を口に運んだ。高志も同様である。

「フグは日本酒に合いますね」

「そうだろう……」

工藤が酒を煽る。そこへ美知子がコンロと鍋を運んできた。

「おっ、いよいよフグ鍋だ」

工藤はコンロに火を点けた。野菜とフグがてんこ盛りの鍋だ。

「私もお酒をもらっていいかしら?」

美知子がグラスを持ってきた。工藤は「おう、飲め、飲め」と上機嫌で美知子に酒を注いでやった。美知子も高志の隣に座って、グーッと酒を飲み乾した。

「大丈夫か、そんな勢いで飲んで?」

「今日は調子がいいの。飲ませて頂戴」

美知子は笑っていた。時折、自分に向けられる視線に、高志は困ったような顔をした。

フグ鍋はすぐに煮えた。それは昆布とフグから出る出汁で実に美味だった。一同、酒を煽りながら、フグ鍋をつつき、刺身に箸を伸ばした。酒もまた極上だった。

どのくらい飲み食いしただろうか。普段、それほど酒を飲みなれていないのだろう、美知子は相当酔っているようだった。そして突然、高志に腕を絡めてきたのである。

「高志さん……」

美知子は甘ったるい声で高志に甘えた。工藤はその様を見て、「ゴホン」と咳払いをした。

「奥さん、やめてくださいよ」

高志が美知子の腕を振り解いた。

「あーら、高志さん、今日は冷たいのね……」

高志は工藤から殺気のようなオーラが噴出していることを感じ取っていた。

「奥さん、酔っ払いすぎですよ」

「奥さんじゃなくて、美知子でしょ」

そう言う美知子の呂律ははつきりしない。工藤の殺気は確実に膨れ上がっていた。

「そうか、お前たちはそういう関係だったのか……」

工藤が美知子と高志を睨み付けた。

「違うんです。誤解しないで下さい。僕と奥さんはただのデイケア仲間……」

高志は慌てて、取り繕うように言いかけた。だが、工藤の殺気は消えない。

「ただのデイケア仲間が名前呼び合ったり、腕を絡めたりするものかね？」

工藤は低い、押し殺した声で唸った。高志の額からは脂汗が滲んでいた。美知子は完全に酔っ払い、尚も高志に腕を絡めてくる。

「こんな破廉恥な家内だとは思ってもいなかった。高志君、君も君

だ。家内が君に好意を抱いていることは薄々感じていたよ。だからと言って、夫の立場としては見過ごすわけにはいかないな」

工藤は苛立ちを隠せず、酒を一気に煽った。

「くそ、不味い酒とフグ鍋になっちまったな」

高志は「ごめんなさい」という言葉が喉まで出かかった。だが、その言葉を飲み込んだ。それを言ってしまつと、自ら過ちを認めることになるばかりか、美知子の立場をも危うくするだろうと考えたのである。酔った美知子は高志に腕を絡めたまま、眠りに落ちていた。

「すみません。今日はこれで失礼します。ただ、本当に誤解しないでください。僕と奥さんは何にもないんです」

「それが許せないんじゃないか。不倫でも何でもしていれば話は別だ。プラトニツクな関係ほどこっちは傷つく……。お前たちの関係に私は入り込めない。だからその方がよっぽど私には辛いし、お前たちの罪も深いんだよ！」

工藤の目は潤んでいた。高志もまた涙腺が緩むのを感じていた。

「帰れ！ 早く帰ってくれ！」

工藤が叫んだ。高志は美知子の腕を解くと、工藤に一礼して立ち上がった。無言で立ち去ろうとする高志の背中に、工藤は「もう家内はデイケアには行かせない。行かせるもんか！」と怒鳴りつけた。高志は耳を塞ぎたかった。だが、工藤の心の傷を思えば、何も反論できないでいた。

翌日、高志は家でずっと寝ていた。身体の中に鉛が入っているようで、起き上がれなかった。まるでうつと二日酔いが一度に訪れたような感覚だった。食欲も無かった。もうすぐ夕方になろうというのに、何も食べていない高志だった。

(あー、昨日はまずかったなあ……)

布団に潜りながら、そんなことばかり高志は考えていた。そして、安易に美知子とプラトニツクな関係が続けていた自分の浅はかさを

呪っていた。

高志の家のチャイムが鳴ったのは、夕暮れが迫ってからだだった。だるい身体を起こして玄関へと向かう。

扉を開けると、そこに立っていたのは美知子だった。

「美知子さん……」

美知子は大きな手荷物を抱えて、そこに立っていたのである。

「昨日はごめんなさい……。あんなことになっちゃって……」

「いえ、いいんですよ。それより旦那さんに悪いことしちゃったなあ。旦那さん、まだ怒ってますか？」

美知子はドスンと荷物を落とすと、いきなり高志の胸に飛び込んできた。高志はその勢いで少しばかり揺らいだ。

「夫とはあれから喧嘩になっちゃって……。家を飛び出してきたの……。しばらく、私を高志さんの家に泊めてくれない？」

縋るような、潤んだ瞳で美知子は高志を見つめた。高志にはどうしていいかわからなかった。その肩を抱きしめることも出来ず、ただ呆然と立ち尽くしていた。

「何とか言つてよ、高志さん。私は今夜、寝るところもないのよ」

「あ、ああ……。取敢えず、中にでもどうぞ……」

高志はやや気後れして、美知子を家へ上げた。

こういう時、女の方が堂々としているものなのだろうか。美知子は「お邪魔します」と言つて、居間のソファでくつろいだ。高志はそんな美知子にお茶を淹れてやった。

「昨日はごめんなさいね。私が酔っ払ってボロ出しちゃったみたい。記憶がないのよ」

美知子は舌を出しておどけてみせた。

「このまま帰らないつもりなんですか？」

「うーん、今は帰る気ないわ。あいつつたら『浮気だ、浮気だ』って怒鳴り散らしたのよ。それは高志さんとはプラトニックな関係だけだけど、あいつはそれがかえって許せないみたい。完全に私の気が高志さんに行ってるって言つてね」

「参ったなあ……」

高志は居間のフローリングに寝転がった。天井が歪んで見えた。工藤への恩と美知子への想いを天秤に掛けるのは、かなり辛い選択だと高志は思っていた。

「高志さんがビクビクすることはないのよ。そのうちあいつ、ここに電話でもよこすでしょうから……。そうしたら『美知子は俺のものだ』って言うてやって」

「そんなこと言えるわけがないじゃないですかあ……」

「ふふふ、冗談よ。でも、どうしようかなあ……。多分、あいつはここに電話をかけてくると思うの」

高志の心臓はドキドキと脈打っていた。天井はまだ歪んでいた。

(もし、本当に電話がかかってきたらどうしよう……)

高志は寝返りを打った。そんな高志の様子を美知子は慈しみ深い眼差しでみつめていた。

「いいのよ、高志さんが心配することじゃないわ。それより……。横に来て……」

だが、高志にはソファまでの距離が、とてつもなく遠い距離に思えたものである。けだるい身体は起き上がることを拒否していた。すると、美知子の方から高志に近づいてきた。

美知子は高志に寄り添うように寝転がった。高志は美知子と目を合わせようとはしない。

「ねえ、私の目を見て……」

そう言われれば仕方がない。高志は美知子を見つめた。慌てて家を飛び出してきたのだろう。少し髪は乱れていた。それでも十分美しかった。

「ああ、美知子さん……。僕、どうすれば……」

すると美知子は高志の背中に腕を回した。美知子は「ごめんね」と呟く。その包容力が高志は幾らかの安堵を覚えていた。

(何なんだろう、この安堵感は……)

確かに美知子は包容力があつた。ただ、心の奥底で満たされてい

くこの感覚は、ただそれだけによるものではないと、高志は感じていた。

「ねえ、目を閉じて……」

この後、おそらくは美知子の唇が襲ってくるに違いなかった。それでも、高志は陳腐な魔法にかかったように瞳を閉じた。案の定、唇は押し当てられてきた。それは柔らかな感触だった。

（ここがプラトニックの境界線だな……）

高志はそんなことを思ったりもした。だが、美知子の唇の攻撃はここで終わらなかった。貪るように高志の唇を求めてきたのである。高志はそれを拒む勇気がなかった。その接吻は快楽だったからである。人間とはこれほど快楽に弱い生き物かとも思う。気が付いた時には高志も美知子の口腔内の粘膜を貪っていた。

「ベッドってある？」

その美知子の言葉に、高志の期待が膨らんだ。もうここまで来たら、引き返せなかった。

「二階に行きましょうか……」

高志は夢中で美知子の乳房に齧りついていてた。まるで赤子が母の乳房を求めるように。美知子は相変わらず慈しみ深い微笑を湛えていた。

「いいのよ、吸って……」

その言葉に高志は美知子の乳首に吸い付いた。美知子の口から「あっ」という喘ぎ声が漏れる。乳首の感触は何ともいえない弾力をもって応えてくれた。だが、高志はめくるめく官能の中にあつて、それだけではない「何か」を感じ取っていた。そう、それは先ほども感じた、何とも言えない安堵感とでも言おうか。

高志は夢中で乳首を吸いたてた。美知子の口からは甘美な喘鳴が漏れていた。

「ねえ、下も愛してくれろ？」

そう美知子に言われ、高志は「女」の部分を覗き込んだ。それは、

かつて付き合った女性のそれとはまったく違う様相を呈していた。熱く溢れる感情を高志に抱かせてくれたのだ。

「あまり見つめないで……。恥ずかしい……」

興奮とともに訪れる安堵の感情は、美知子の「女」の部分を見ても同じだった。そこに高志は躊躇いながら、唇を寄せる。美知子の喘ぎ声が一際高くなった。

高志は思った。自分は女性のここから生まれたのだと。懐かしい思慕にも似た安堵感は「母性」を求めているのかもしれない。その「母性」を求める本能と「生殖」を求める本能とが融合し、高志に遠い快樂の記憶として刻まれているのだ。

「ねえ、僕のものも愛してくれないかな？」

起き上がった高志は既にはちきれんばかりに怒髪した陰茎を差し出して言った。美知子はややもすると妖しい上目遣いでそれを啜えた。口淫を求めるのも、「母性」に対する欲求だと言われている。早くに母親を癌で亡くした高志にとって、それは悦び以外の何物でもなかった。

「ああっ、抱いて！」

興奮を抑えられなくなったのだろうか。美知子が叫んだ。

「美知子さんが僕を抱いてください……」

高志がそう言つと、美知子はまた慈しみ深い微笑を湛えて、「じゃあ、私が上ね」と言った。

高志は美知子の重みと、快樂の流れ行く様を時間をかけて味わうことになった。

結局その晩は工藤からの電話はなかった。

「明日はデイケアですね。行きますか？」

「高志さんが行くなら、私も行くわ」

美知子はそう言つて、高志に抱きついてきた。美知子はまた高志の唇を求めてきた。

その晩は美知子と高志は一つのベッドで寝た。高志は美知子に「

抱きしめていてください」とお願いをした。美知子は「いいわよ」と言つて、高志を抱きしめてくれた。美知子と高志は先ほど抱き合つた疲れがあつたのだらう。すぐにまどろみの中へと落ちていつた。高志は夢を見た。それは顔さえ覚えていない母親に抱かれる夢だつた。ふと母親の顔を見ると、それが美知子に変わつていた。美知子はまるで我が子を慈しむように、高志を抱きしめていてくれたのだ。

（僕が美知子さんに求めているのは、やっぱり母親の愛なんだろうか……）

夢の中でそんなことを考えたりもした。その後は、また深い眠りの淵へと引きずられていつた。

翌朝は意外とすつきりと目が覚めた高志であつた。その横に美知子はいなかつた。高志は一瞬、美知子がどこかへ行つてしまつたのではないかと不安になつた。夕べの夢の記憶ははつきりと総天然色で覚えていた。高志は慌てて一階へと下りた。すると、美知子が朝食の支度をしていたのである。

「あら、おはよう。ごめんなさい。勝手に冷蔵庫を開けて朝食の準備をしちやつたわ」

「お母さん……」

「え？」

「美知子さんがお母さんになつた夢を見たんです……」

「あははは、それじゃあ、昨日したことは近親相姦じゃない」

美知子はさも可笑しそうに笑つた。だが、高志は笑つてはいなかつた。美知子がスツと高志に近づいた。息がかかる距離だ。

「無邪気な坊やだこと」

美知子はそう言つて、いきなり高志の唇を奪つた。高志は目を瞑る暇もなかつた。あつさりど、唇を奪われたのである。それはあたかも、母親が寝起きの息子にする挨拶のキスのような感じだつた。高志にはそんな風を感じ取れたのである。

「さあ、朝食を食べてデイケアへ行くわよ」

美知子が爽やかな笑顔を浮かべた。

デイケアで高志は復職へ向けてのトレーニング・プログラムが開始となった。それは今までの料理やスポーツ、ハンドクラフトなどのプログラムとはまったく違い、自己観察記録をつけるプログラムや、認知行動療法と呼ばれる思考を変えていくプログラムも用意されていた。またSSTでは苦手な場面を克服する模擬演技も行われることとなった。これらのプログラムは復職を前提としたそれであり、美知子とは別室で作業することとなったのである。

その日、早速、高志はSSTを受けることになった。SSTでは実際の会話場面を演じながら、苦手なシチュエーションを克服するプログラムである。美濃部という患者が「残業を断る」という場面設定でトレーニングを受けるのを高志は椅子に座って見学していた。上司役は村田という患者が演じることになった。

「あー、美濃部さん、今日はちょっと残業してもらいたいんだがね」
村田が皮肉っぽい顔を作って言う。

「すみません。まだ病み上がりなので、残業は勘弁してください」
美濃部が申し訳なさそうに言う。

「しかし美濃部さんだって、復職したからには百パーセントの力で仕事をしてもらわなければ困るよ。うちの部署に残業は付き物だからね」

「でも、今が自分の限界なんです。これ以上仕事をすると、また病気が悪くなるかもしれません」

「仕方ないな。だがそのうち第一線に復帰してもらおうよ」

こうして美濃部の残業は免除された。このやり取りを通じて、反省点をみんなで述べるのだ。そこで上がった意見は「困り感が出ていてよかった」「主治医や産業医から残業を禁じられていると聞いてはどうか」などであった。高志はそのやり取りを聞いて、「これは使える」と思った。もし、工藤が怒鳴り込んできた時の対処法を考えておこうと思ったのである。

「次、やってくれる方はどなたですか？」
スタッフが患者を見回した。だが、さすがに高志も不倫のシチュエーションを提案するほど勇気がなかった。

デイケアの帰り、美知子は「別室で作業なんて、寂しかったわ」と言っただけで腕を絡めてきた。

「今日はちよつと飲んでいきませんか？」

高志はそう美知子に提案した。美知子は「いいわよ。夕飯作るのも面倒だし」と言っただけで承してくれた。

「でも、この前お酒で失敗したばかりだから、気をつけなくっちゃ」
美知子がおどけて笑った。

その居酒屋はA診療クリニックから五分くらい歩いたところにある。美知子は高志にエスコートされるように店内に入った。

「いらつしやいませ。お二人様でしたらカウンターでお願いします」
威勢のよいマスターが高志に声をかけた。この店は高志が馴染みの店であった。

カウンターに腰掛けた二人は生ビールを注文し、ジョッキをカチンと鳴らした。美知子も高志もグーツとビールを胃の中へ流し込んだ。

「実はね、うちの人、以前に浮気をしたことがあるのよ。私はそれを許してあげたのに……」

美知子が愚痴っぽく言い放った。

「そうだったんですか……。今度は自分の番だと？」

「でも不思議なものね。浮気って言うけど、本気に近いわ。高志さんとは……」

高志は考え込んだ。確かに美知子のは好きだ。だが、夕べの夢が忘れられなかった。美知子に「母性」を求めていることは間違いないだろうと思う高志であった。

「美知子さんには恋人であって、母親であってほしいです」

高志は本心を打ち明けた。すると、美知子は虚ろな瞳をビールに

落とした。

「そっか、やっぱり『お母さん』か……」

「ごういうの、エディプス・コンプレックスって言うんですよね。とすると、旦那さんは父親になるのかな」

「ふふふ、そっかもしれないわよ。ちよつと気が利かない父親だけどね。でも、高志さんはその父親から見事に恋人である母親を獲得したのよ」

美知子が悪戯っぽく笑った。高志ははにかむように笑う。

「ああそっだ、今日のデイケアでSSTというプログラムをやりましてね。苦手な場面を克服するトレーニングなんです。僕は美知子さんの旦那さんに怒鳴り込まれたらどうしようかなって考えて……」
「怒鳴り込んできたりしないわよ。むしろ、情けない顔をしてくるんじゃない。自分の過去もあるしね」

きっぱりと美知子が言った。その横顔はどこか自信に満ちている。

「そうですか。実際には何て言うてくるでしょうかね？」

「泣きながら『美知子、っ、帰ってきてくれーっ』って言うわよ。きつと……」

「そうしたら、僕は謝るべきでしょうかね？」

「何で高志さんが謝るのよ」

美知子は少しむくれたように言った。だが、高志には工藤への申し訳ない気持ちがあつたといえれば嘘になる。美知子がいつまでも自分の家にいられるわけでもないことは、薄々感じ取っていた高志だった。問題は着地点だった。

「今頃、あの人は自問自答しているわ。多分、苦しみながらね……。でも私は高志さんに惚れちゃったもんね」

美知子はそう言うと、甘えるように高志に腕を絡ませてきた。それを振り解くほどの心の強さを持ち合わせている高志ではなかつた。

高志はマスターの目が気になつたが、マスターは忙しそうに包丁を振るっていた。

結局、その晩も美知子と高志は抱き合った。お互いがお互いを求め、快楽を追求していたのである。今日も美知子は高志の上に乗っていた。肉と肉の擦れ合う感触を堪能しながら、高志はかつて工藤が言っていた、「人間の欲望に限りはない」という言葉を思い出していた。

美知子は激しく腰を振っていた。高志は自分の分身が肉壁に擦れて揉みくちやにされる快楽を覚えていた。

高志は美知子の乳房に手を伸ばした。豊満な乳房は高志の手では余りある。それを揉み、乳首を弄った。美知子の喘ぎ声が一段と高くなった。

高志は果てる時、心の中で「お母さん！」と叫んでいた。快楽の記憶は確かに流れながら刻まれていった。それはどこか懐かしいような気もする。

(エディプス・コンプレックスか……)

エディプスが本当に父親を殺せるのかは疑問だった。それに美知子は本当に自分に恋愛感情を寄せているのかも、高志にはわからなかった。少々下品な言い方をすれば「若いツバメ」との情事を楽しんでいるようにも思える。自分の子どもとおなじくらいの年齢の男との情事に耽る人妻の心を、どんな物差しで測っていいのか高志にはわからなかった。

美知子が高志の家に来て、一週間が過ぎようとしていた。その間に美知子と高志は何度も抱き合ったが、やはり母親への思慕のような念を美知子に感じることは拭い去れない高志であった。

美知子が夕飯の支度をしている。エプロンを着けたその後姿に、欲情というよりは、母の愛情を高志は感じ取っていた。

その時、不意に玄関の呼び鈴が鳴った。高志が玄関を開けると、そこに工藤が立っていた。

「工藤さん！」

「すまん。家内を、美知子を返してくれ！」

工藤はその場に土下座をした。高志は困ったような顔をして、「頭を上げてください」と言った。その口調はとても優しいであった。「あら、あなた……」

夕飯の支度をしていた美知子が玄関に出てきた。

「美知子！ 頼む、帰ってきてくれ！」

工藤が深く頭を下げた。美知子は困惑したような表情を浮かべていた。

「まあ兎に角、上がってくださいよ」

高志は工藤に家の中に入るよう促した。工藤は泣きそうな顔をしている。高志は工藤を居間へ通した。工藤は俯きながら、まるで裁判所の被告のような面持ちをしていた。

美知子がお茶を淹れてきた。

「まあ、落ち着いて話し合いましょう」

高志がそう言った。工藤は「ええ」と言ったまま、俯いている。

「あなたもよく来れたわね。自分のことを棚に上げて、私を責めて……」

美知子が不快感を露にして言い放った。高志は「まあまあ」と言っ
つて、美知子をなだめた。

「私は美知子がいないと駄目なんだ……。今回はそのことを思い知らされたよ。ずっと美知子は私のことを想ってくれていると過信していた。でも、違うんだ。私は美知子を愛している。そのことをはつきりと気付かされたんだ」

工藤が言葉を選ぶように言った。

「私を愛しているですって？ 今まであなたがうつ病になった私に尽くしてきたくれたのは贖罪の意味じゃなくて？」

今度は美知子が困惑したような表情をする。

「それもある。だが、やっぱり愛しているんだ、美知子！」

工藤の瞳は潤んでいた。

「お願いだ。帰ってきてくれ！ これでお互いファイフティー・ファイフティーでいいじゃないか？」

工藤がまた土下座をした。高志は「まあまあ、顔を上げてください」と言って、その手を握った。

「高志君……。君にもすまないことをした」

「僕も気付いたんですよ。僕が美知子さんに寄せる想いは、母親への思慕のようなものだ……。美知子さんの中に理想の母親像を見ていたんです。僕は小さい頃に母親を亡くしましたからね」

「そうだったのか……」

「僕は父が死んで、天涯孤独になってしまった。そんな時、ともにうつ病の気持ちを理解し合える美知子さんが現れた。そしてその中に理想の母親像を見出していたのです」

高志は深く目を瞑った。その瞼の裏に美知子の裸身が浮んでいたが、そんなことは口が裂けても言えなかった。

「そう、やっぱり高志さんにとって私は母親なのね……」

美知子が少し寂しそうに呟いた。美知子はお茶を啜ると、おもむろに立ち上がった。

「私は母親でもいいの。高志さんと心でつながっていたいのよ」

「美知子、お前……」

工藤が固唾を飲んだ。高志は呆気にとられたような顔をしていた。「工藤さん、お願いです。美知子さんは何とか僕が説得して家に帰しますから、今後のデイケア参加だけは認めてくれませんか？」

高志は絶るような思いで、工藤に懇願した。美知子との接点は持ち続けていたかったのだ。ここで美知子を失うことは、高志にとって二度も母親を失うように感じたのである。

「いいだろう。約束しよう。もう、家内を束縛したりしないよ。君も母親に会えなくなると寂しくなるだろうから……」

「いいえ。家に帰っても、デイケアにはもう行かないわ」

美知子がちよつときつめの口調で言った。

「お前……」

「美知子さん……」

工藤と高志は口をポカーンと開けて、美知子を見上げた。

「その代わり、うちに高志さんを呼ぶことを許してほしいの。高志さんは家庭的な環境を求めているんでしょ？ だったら、デイケアじゃなくてうちに来て。ねえ、いいでしょ、あなた……」

「美知子、お前……」

「そしてあなたは高志さんの父親として接する。今までどおり釣りに誘ってあげてね」

そう言う美知子の瞳は潤んでいた。

「わかった。美知子の言うとおりにしようじゃないか。じゃあ、家に戻ってくれるんだな？」

美知子は頬に滴を垂らしながら頷いた。

こうして一週間の、美知子と高志の甘い生活は終止符が打たれた。高志は家から出て行く二人を優しい瞳で見送った。ただ、美知子と交わした快樂の記憶だけが残っていた。それは高志の脳の一番奥深いところに刻まれていた。

その翌週の土曜日。高志は工藤の家を訪ねていた。工藤はさつぱりとした声で家へ来るよう高志を誘ったのだ。高志は多少、胸がドキキしたが、一升瓶をぶら下げて、工藤の家へと向かった。

「やあ、よく来てくれた」

工藤はにこやかな笑顔で高志を迎えてくれた。

「丁度、家内がこの前の残りのフグで鍋の準備をしているんだ。この前のフグ鍋は不味かったから、食いなおし、飲みなおしだ」

高志は照れたように笑った。工藤は「さあさあ」と家へ上がるように高志を促す。

居間にはコンロの上に置かれた鍋が、もう煮えており、良い匂いを放っていた。

美知子は「いらっしやい」と言って、極上の笑顔を高志に向けてくれた。美知子が天死してくれていたのはフグ鍋だけではない。フグと鶏の唐揚げ、そしてサラダや自家製の漬物まで準備していた。

「息子が帰ってきたんですもの。料理には腕を振るうわよ」

その美知子の言葉に高志は照れ笑いを隠せなかった。

それは美味しい料理だった。フグ鍋はもちろんのこと、唐揚げや凝ったサラダも美味かった。

「僕、もうすぐ復職するんですよ」

「ほう……」

工藤が高志に酒を注いだ。

「正直、少し不安で……」

「わかるわ。その気持ち……。でもね、ここが我が家だと思って気軽に構えたら？」

美知子がにこやかに笑って言った。

「ねえ今度、私も釣りに連れていってよ」

美知子がフグの唐揚げを頬張りながら言った。

「でも、お前は船に弱いじゃないか」

「あら、川釣りだっていいのよ」

「うーん、川釣りねえ……」

工藤が腕組みをして考え込んだ。沖釣りを専門とする工藤は、あまり乗り気ではないようだ。

「じゃあ、バーベキューでもしながら、マス釣り場に行くっていうのはどうでしょう？ 今のマス釣り場は大体バーベキューの材料も揃っていますし、貸し竿なんかもあると思うんですよね」

少し酒の回った高志は陽気にそう提案した。

「ああ、それは楽しそうだな。いいレジャーだ」

工藤も相槌を打つ。美知子は「そうですね、そうですね？」と乗り気だ。

こうして来週の土曜日はマス釣り場でバーベキューをすることに なった。無論、高志も一緒だ。

宴たけなわになった頃、電話が不意に鳴った。美知子が電話を取る。

「ああ、愛美？ どうしたの？」

美知子の声は明るかった。工藤は「娘からだ」と言って、酒を煽

った。

だが、すぐに美知子の声は暗く沈んだ。

「ええ、そう……。あなたもなっちゃったのね。よかったらうちに帰ってくれば？」

工藤の顔が曇る。工藤と美知子の娘、愛美はまだ独身だが、今は実家を出て一人暮らしをしている。

美知子が沈痛な面持ちで電話を切った。工藤は「どうした？ 愛美に何かあったのか？」と慌てた様子だ。

「愛美もうつ病になって、仕事を辞めちゃったみたいなの……。今は家でゴロゴロしてるって……。ああ、うつ病って遺伝するのかしら？」

「そうか……」

工藤が苦そうに酒を啜った。

「娘さんもデイケア……。どうですかね？」

高志が恐る恐る進言した。すると、美知子は「あつ、それいいかも！」と言って、すぐさま反応した。

「まあ、デイケアの良さは美知子や高志君の方がよくわかっているだろうからな。愛美にまず情報提供だけでもしてやったらどうだ？」

美知子はすぐさま受話器を手にした。

愛美がデイケアの体験にやってきたのは水曜日だった。丁度、高志と同じ日に重なった。高志は愛美を見て、驚愕した。愛美の顔のつくりは美知子そっくりだったからである。

愛美は高志に「この度はお世話になります」と、丁寧に頭を下げた。

「いや、うつ病は他人事じゃないんだよ。君のお母さんもううつ病だし、僕もうつ病だからね」

すると愛美はホッとしたような表情を浮かべて、高志を見つめた。

高志はその日、SSTのプログラムだった。高志は自ら発表を進み出た。場面設定は「好きな人に告白する」である。

デイケアが終わって、高志は愛美に「どうだった？」と尋ねた。復職プログラム以外の参加者は料理で天ぷら作りを行っているはずだった。

「うーん、楽しいと言えば、楽しいし……。まだよくわからないわ」「そのうち楽しくなりますよ。調子が悪い時に休んでも、誰も文句を言いませんよ」

高志は笑顔を作って、そう言った。すると、愛美の顔から緊張が解れた。

「ねえ、お茶でも飲まない？」

愛美は笑いながら、高志を誘った。高志は「いいよ」と気軽に了承した。

高志が愛美とお茶を飲んだのは、美知子ともよく通ったカフェだった。

「うちの両親、高志さんのこと、息子だっって言っていたわよ」

愛美のその言葉に高志は思わず苦笑を漏らした。愛美は知っているのだろうか。自分の母親と、目の前にいる男が関係を持っていたことを。おそらくは知るまいと高志は思う。

「そうだね。君のご両親には本当の親のように接してもらっているよ」

「高志さんは大分、うつも良くなっているみたいね」

愛美がカフェオレを啜りながら笑った。

「うん、復職が近いんだ」

「そっか、私は仕事を辞めちゃったからなあ……」

「何の仕事をしていたの？」

「公務員で保健所に配属されていたの。そこで犬猫の処分のお手伝い」

「犬猫の処分……？」

高志はその意味がピンとこなかった。

「飼いきれなくなって捨てる人も多いのよ。そういう犬猫を引き取るの。すると犬猫は動物保護センターというところに預けられるん

「ただ、飼い主が見つからないと、五日で殺されるのよ」

「そ、そうなんだ……」

「犬も猫も自分の運命を予知する能力は高いみたい。捕獲する時は必死で逃げるけど、動物保護センターに移されると、まな板の鯉のようにおとなしくなるの。そして最後は毒殺よ。私はそんな仕事がつくづく嫌になったの」

「そうか……。それは辛かったね。でも公務員だろう？ 辞めちゃうのは勿体なかったなあ」

「公務員っていうのは世間一般の常識がまかり通る世界じゃないの。その独特の体質も嫌だったなあ……」

「そうか。自分に合わない仕事を続けるのは辛いもんだもんね」

高志は愛美の身の上に同情していた。そして、「慌てずにゆっくり治療しなよ」と助言した。

「うん。高志さんって優しいのね……。でもね、私の病気はうつ病だけじゃないの……」

「え？」

「セックス依存症……」

愛美は声を潜めて呟いた。その言葉に高志はドキリとした。美知子と交わった日々が鮮明に甦った。

「実は職場の数人とも関係を持つちゃってね。それで居辛くなったのもあるかな」

「そうなんだ……」

高志には「セックス依存症」の何たるかはよくわからなかった。だが、どうやら愛美は性交渉を前提とした男性の存在なしでは生活できないようだ。

「いつか、公用車で捕獲した雄犬と雌犬を搬送していたら、車の中でつながっちゃってね。それを見て興奮した私は、公用車の中で運転手さんにつながっちゃったこともあるのよ」

「悲しき欲情だな……」

高志が唸るように呟いた。

「そう、悲しくて空しいつながり……。それでも、求められずには
いられない。そんな病気なのよ。職場でも陰口を叩かれたわ。『あ
いつは淫乱だ』ってね。セックス依存症もつつ病もみんなストレス
が原因みたい……」

愛美がため息をつく。やるせない空気が流れた。

「今、お付き合いしている人はいるの？」

「いないわ。そのうち誰も私のこと、相手にしなくなっちゃったも
ん」
「……」

重い沈黙が流れた。愛美はカフェオレを啜って「ふう」とため息
をついている。高志はエスプレッソコーヒーをグイと飲み乾した。

「愛美さん……。僕と付き合ってくださいませんか？ 愛美さんとなら
同じ病気として支え合っていけると思っています……」

「いいわよ」

愛美の返事は呆気なかった。

「丁度、男日照りが続いていたし、それに高志さん、タイプだもん」
愛美はにっこり笑って、残りのカフェオレを流し込んだ。

その晩、愛美は高志の家に泊まった。無論、愛美の両親の許可な
ど得てはいない。高志にしてみれば、母親とも愛美とも関係を持っ
たことになる。そこにごどこか背徳の匂いを感じていた。

愛美は積極的だった。自ら服を脱ぎ、果敢にアプローチしてきた
のだ。それは「さすが、セックス依存症」と高志を唸らせるものだ
った。

愛美は高志とつながりながら言った。

「ねえ、愛してるって言って……」

「ああ、愛美、愛してるよ」

すると愛美は満足そうな微笑を湛えて、高志に身体を預けた。

その晩は何度も、何度もお互いを求め合った。

「なあ、今週の土曜日、愛美の両親とマス釣りに行くんだけど、愛

美も一緒に行かないか？」

もう夜が白みかけた頃、高志は愛美の耳元で囁いた。

「高志と一緒に行くわ。それより、もう一度……」

愛美が高志の背中に腕を回した。高志はさすがに疲れを感じていたが、応えないわけにはいかなかった。唇と唇が重なり、お互いの粘膜を貪り合う。高志の脳裏には美知子との淫らな接吻の記憶が甦っていた。それに、愛美を抱く時も、あたかも美知子を抱いているような錯覚に陥ったのである。顔のつくりが似ていることもあっただろう。しかし、愛美は愛美だ。肌の張りや艶が違う。それでも美知子を連想させたのは、やはり血のつながりかと高志は思った。

「なあ、啜えてくれないか？」

「いいよ……。好きだね、フェラチオ……」

高志は己の分身が口腔の粘膜で包まれる快楽に酔った。その快楽は永遠に続いてほしいと思ったものである。

それからというもの、高志と愛美は半同棲状態となった。そして土曜日を迎えた。マス釣り場でバーベキューをする当日である。高志と愛美は連れ立って、工藤の家を訪れた。それも腕を組んでである。

「どうしたの、あんたたち……」

その姿を見た美知子は愕然とした様子だった。工藤は呆気にとられたような顔をしていた。工藤は「いやー、高志君が本当の息子になったよ」と素直に二人の仲を祝福してくれた。ただ、美知子の視線にジェラシーが含まれていることを、高志は感じ取っていた。

こうして高志たちは「早戸川国際マス釣り場」に向かって、車を走らせた。行きは工藤が運転する。帰りは酒を飲まない愛美がハンドルを握ることに決まった。

愛美も酒が飲めないわけではないが、「今日はやめとく」と言っていた。

早戸川の流れは清冽だった。その流れの中にニジマスの姿を見る

ことができる。

早戸川国際マス釣り場は上流部が団体向けの区画で割り切った流れとなっている。そこにニジマスを放流してもらうのだが、前の客が釣り残したニジマスの姿も多く確認できた。貸し竿は竹でできた華奢なものだったが、これでも十分釣れるという。

工藤と美知子は右岸で、高志と愛美は左岸で釣ることになった。放流したてのニジマスの食いは良く、あつという間におかずを釣り上げることができた。

高志が愛美の釣ったニジマスから針を外していた時だった。

「高志、お母さんとも関係を持つていたんじゃない？」

コソツと愛美が高志の耳元で囁いた。高志は心臓が張り裂けそうになるくらいドキツとした。だが、気取られまいと冷静を装う。ただ、返事はできなかった。

「やっぱりね。どうも、お母さんの高志を見る目が変だと思ったわ。それにまるで、私が邪魔者みたいな目つきで見るとなもの」

「ははは、やっぱり女の勘は鋭いな。軽蔑したかい？」

「ううん。だって『セックス依存症』の私にはお母さんの血が流れているんだもの。お母さんが高志に惚れて、関係を持つても不思議じゃないわ」

そんな会話は川の流れの音に遮断されて工藤と美知子には聞こえていないようだ。

「僕は美知子さんに母親のような思慕を持っていたんだよ。僕は小さい頃に母親を亡くしているからね」

「そっか。でも、もう高志は私のものだよ」

「僕もそのつもりさ。美知子さんには本当の母親のように接してもらいたいと思っているよ」

高志は釣竿を振った。さすがに十匹以上釣ると、魚もスレてくる。高志は何度も仕掛けを流し変えた。

「ねえ、そのうち『親子丼』でもする？」

「え？」

高志は驚いて少し浮き上がっただろうか。仕掛けが不自然に流れた。

「ふふふ、冗談よ……」

愛美は悪びれず、それでいて小悪魔のような妖しい微笑を湛えていた。高志の中にはそれぞれの快樂の記憶が刻まれている。「親子丼」とは正直なところ、甘美な誘惑だった。だが、高志は頭を振って、不埒な妄想を追い払おうとした。

対岸では工藤と美知子がバーベキューの準備に取り掛かっていた。ジーンズを穿いた美知子の形のよいヒップが揺れる。快樂の記憶は音を立てて甦っていった。

「こら、お母さんに見惚れるな！」

愛美が高志を一喝した。高志は「すみません」と言っ、意識を流れるウキに集中させた。高志の持つ釣竿を、その上から愛美も握った。高志は一本の釣竿で釣るのも悪くないと思う。するとウキが沈んだ。

「きゃーっ、きたきた！」

愛美が無邪気に笑った。高志と愛美は一本の釣竿でニジマス釣り上げた。

「おい、バーベキューの準備ができたぞーっ！」

対岸で工藤が叫んだ。高志と愛美は顔を見合わせた。そしてクスツと笑う。炭火で焼いた肉のいい匂いがした。高志は愛美をエスコートしながら対岸へと架かる丸木橋を渡った。

「いずれ息子は親からひとり立ちするものよ」

高志の耳元で愛美が囁いた。高志は「うん」と頷いた。

上流からは気持ちの良い秋風がそよいでいた。

(了)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0424j/>

快樂の記憶

2010年10月8日14時44分発行